

## 英雄/愚者/S. レヴィン

勝井伸子

### 1

Bernard Malamud (1914-1986) の3作目の長編小説である *A New Life* (1961) は題名の示すように、新しい生の可能性を探る物語である。最初の長編小説である *The Natural* から *The Fixer* へ至る4つの作品は、様々な異なる主人公一天性の才能 (the natural) を持つプロ野球選手、聖フランシスを崇拝する強盗であった食料品店の手伝い、西部の大学へやって来た教師、ロシアの修理屋を持つが、いずれも不条理な世界における苦悩する凡庸な人物の物語が、時には幻想的なイメージにかたどられて展開しているとしばしば言われている。しかしアメリカ文学の伝統の延長上にあるものとして、これらの作品を評価することはなおざりにされがちである。ここで言うアメリカ文学固有の伝統とは、アメリカを新しいエデン、約束の地としての救済力を持つ理想的な田園と見なす幻想をめぐる物語の伝統であり、そこで英雄的に無垢な主人公が田園的なアメリカで生まれ、世界とただ一人対決し、打ち負かしたまたは打ち負かされる物語の伝統のことである<sup>④</sup>。ユダヤ系作家である Malamud も、苦悩の民としてのユダヤ的経験を描くとしてしか評価しないのは、アメリカ作家としての面を無視したことになるのではないだろうか。

それどころか、Malamud は実はアメリカ文学の田園と再生の神話に対して極めて深い関心を示しているといえるのである。それぞれの主人公に注目してみると、いずれも出生不明の本質的には無垢な主人公が過去から逃れて新しい life を求めて現れ、そこで彼の本質が試されその運命と選択が語られているとみることができる。*The Natural* の Roy Hobbs, *The Assistant* の Frank

Alpine, *A New Life* の Sy Levin, *The Fixer* の Yakov Bok は、それぞれ皆孤児であり、物語が「経験とロマンス、言い換えれば a new life を求める旅」で始まるという点で共通している<sup>(9)</sup>。Giles B. Gunn が指摘したように Malamud の4小説は R. W. B. Lewis のいうアメリカ文学固有の原型的物語がそうであるように、「世界に投げ込まれた自己 (self) の本質を試す物語」とみることができるのではないか<sup>(10)</sup>。少なくとも、Malamud がアメリカ文学固有の無垢な若者と世界の出会いというモチーフを、意識して用いているということは言えそうである。

特に *A New Life* は題名自体、約束の地における第2の機会としての新しい life の可能性を明示するものと受け取れる。しかも、舞台は太平洋に近い西部の農業地域である。小説中には、自然の美しさに関する描写が繰り返し現れ、都市からやって来た主人公 Sy Levin は、新鮮な感動を持って田園の美に鋭く反応している。しかも Levin は大学教師を理想の生き方と考えて西部で新しい Levin として生きようと願って東部からやって来たのだ。Sam B. Girgus はアメリカが約束の地カナンであると言う考えと結び付いて、「自由と再生の示唆を含むフロンティアと西部の神話は非ユダヤ人同様ユダヤ人の想像力をかきたてた」と主張し、西部における個人の再生の神話を肯定する、「過去からの新たな離反意識と西部における救済」を扱った小説がユダヤ系作家によって書かれているという<sup>(11)</sup>。Girgus の主張するように、Malamud が「都市のユダヤ人と西部神話の出会い」を扱っているのは確かだと言っていいたいだろう。しかしそれでは、*A New Life* が「伝統的な、西部における“a new life”追求の物語の現代版」で<sup>(12)</sup>あり、そこで再生がおこなわれ英雄的な若者が生まれたと言えるだろうか。

そこで、Levin がどういう a new life を手にいれたのか、田園と再生の神話に対して、Malamud がどういう姿勢を示しているといえるのかが、問題になって来る。Leslie Fiedler は *A New Life* を論じて、メタ西部小説の装いを凝らした反西部小説であると主張し、Levin を喜劇的な fool だとしている<sup>(13)</sup>。Fiedler は Levin が秩序を重視するこちこちの教師タイプであることや、車の

運転もろくにできない無能さ等の点で西部小説のヒーローとしてイメージには合わないこと、Levin が旧い都市的東部にかわるものとして「別の生活様式、変化した意識のモード」を持たないこと、「英雄的孤独のなかでの、再生」ではなく2番目の夫、継父としての人生を選ぶ点が西部小説のヒーローとは正反対であることなどから、この小説を反西部小説であるとみなす。だが愛と理想の相克とその結果としての追放の結末は、場違いの喜劇とはそぐわないのではないか。実は、Malamud がこの小説において扱ったアメリカ文学の伝統とは、自然の救済力、田園の理想、無垢と墮落の複雑な関係であり、小説の主要な関心事はそこでなされる選択と運命の問題だったと思われる。

## 2

大陸横断鉄道に乗ってはるばる東部 New York から太平洋に近い北西部の田舎町へ、新任の大学講師、もと大酒呑み、の Levin がやって来る。そこで、はじめて自然にふれた Levin は自然を神秘と驚きに満ちたものと感じる。山に囲まれた田園 Cascadia に到着したとき、彼は「開拓者達が幌馬車に乗り、初めてこの谷に乗り入れたときのことを想像して感動し（中略）幸福感に身をふるわせた<sup>9)</sup>。」この *The Great Gatsby* の最後の部分を連想するような一節は、暗示的である。アメリカの美しい緑の胸は、Levin にとっては山々に囲まれた田園、Cascadia であった。

Levin は自然とその美を神秘的なものとしてとらえる。周辺の地理を説明する上司の Gerald Gilley がアラスカ、北極という言葉の口にするると、忽ち Levin は感動して「北、（中略）何と言う深遠な神秘！人間が誰一人居なくなるところまで北へ行く。その沈黙、冷たさ（中略）を想像してごらんなさい。」(p.24) と言って Gilley に「きみは、詩人だね。」と言われる。Cascadia での生活が始まっても、Levin は自然のなかに神秘と啓示を見いだすのが常である。秋が深まる Cascadia で Levin は冬の気配の中に死を感じ、同時にその中に生命の兆しをみいだすのである。彼は「毎年繰り返される象徴的な自然の

死」に憂鬱を感じ、同時に、「冬小麦となるはずの鮮やかな緑の草々」に新しい生命と希望とを見だし、生まれて初めて雁がとびたつのをみて「風をはらんで無限の空間へと高く 船出してゆく船」のようだと感じて自分も船出して「自然 (nature) に勝利を取めたい」と熱望する。(p. 110) 散歩に出ると、空、畑、木、太陽、農夫たちをみつめ、「幻想にふけていると心が喜びにふくらみ、豊かさを感じて「都会育ちのしか知らぬ彼には、何もかもがめずらしく」おもえたのである。(pp. 52-53) そして、生まれて初めて Levin は「室内と屋外が交流しあう生活」を経験して芝生を刈り、梨を取り入れ、庭の落ち葉を掃き、鳥が虫をついばむのを眺め、一瞬にせよ「晩年のソーロになったような気分」にひたたりするのである。(p. 53) 自然に対するこのような感受性は、Levin が幼児のように文字通り生まれて初めてこのような自然に身をおいた為に生れたもので、それは無垢な驚きと好奇心に満ちているといえるだろう。R. W. B. Lewis がいう Thoreau が Walden で目指したような経験、すなわち「自然によって決定され全体的な意識によって豊かにされた生活」言い換えると、「個人が人生を初めからやり直すことであり (中略) 幼児への復帰、幼時の世界と驚きへの復帰とみられもした」まさにそういう経験ではないだろうか<sup>6)</sup>。Levin 自身の内的世界では、「新しい Levin. 長く無駄に過ごされた月日の後で、目的を持ち得た男」になったと意識される。(p. 52) 西部で新しい人生へのチャンスをつかむまでは、彼は、「人生にこれといった希望を持たず、「自分を偽って」すごしてきたことを告白し、「昔なくしてしまった理想をまた追いかけている」と語る。(p. 20) このように、Levin と自然との関係は神秘的であり、肯定的に描かれているとみるべきであろう。

Levin は Cascadia で、新しい生を求めて動き回る。それは矛盾する二つの Levin 像—ロマンティックな冒険者としてまた喜劇的な失敗者となって現れる。人生に何を望むかと聞かれて、彼は“Order, value, accomplishment, love” (p. 164) と答える。彼は自己の理想を、文学を教え、芸術によって、「人間の精神は何か、また何を成しうるかを教える」(p. 28) ことであると考えている理想主義者である。だが Cascadia は彼の理想とは相いれない場所である

ことを彼は発見する。Cascadia は一見理想的な田園で、Levin の目に Cascadia は歴史のない、平和で美しい空間と映る。

“After the covered wagons apparently little had happened that was worth public remembrance……But what Easchester lacked in communal memory and imaginativeness, it made up in beauty and quiet……He did not mind the smallness of the town. Had not Concord been for Thoreau a sufficient miniature of the universe? (p. 69) Cascadia はこのように過去の記憶をもたない小宇宙である。つまり、Leo Marx が都市と荒野の中間的景観としてアメリカ文学の中に繰り返し現れたと指摘した意味での田園 (garden), 平和で美しい牧草地、歴史からの避難所としての田園であるともいえるのではないだろうか<sup>9)</sup>山に囲まれ、東部から遠く離れた Cascadia は、Gilley の妻 Pauline によれば、“sheltered” “landlocked and bland” (p. 21) で、他の世界から隔絶した空間なのである。

農業的西部における “a typical American state college” である Cascadia 大学は、技術を中心にした単科大学であり、技術が芸術より重視されている。学長自身「プラトン、シェラー、エマソンなどは社会に役立つよりも害を流したほうが大きい」(p. 248) などと言うのである。これは Leo Marx が感傷的田園主義のレトリックとして指摘した中間的景観の社会と、奇妙にも一致するように見えるのである。その社会とは Marx によれば「技術と自然の幸福な均衡を示す田園国家」であり、「自然と人工とが均衡した、自己充足的で静態的な世界」である<sup>10)</sup>。若い助教授 Joe Bucket は自ら煉瓦を積み、家を建てながら博士論文を書いている。Levin を採用してくれた Gilley の趣味は釣り、ゴルフと写真である。写真は、技術の力で自然を映すものである。「アメリカ文学における自由」や、「James Fenimore Cooper の聖なる野人」「Huckleberry Finn における河の旅」などについて講義する最も学者的な人物に見える Fabricant も20エーカーの農場をもち、牛や馬を飼っている。彼らの生活は Thoreau が Walden で送った生活、「家を建て、豆を育て、イリアッドを読み、池の深さを探る<sup>11)</sup>」に似ている様に見える。だが、これらの人々は、Thoreau の

言う「神秘的な中心」からははるかに離れているのだ。

かれらはむしろ Concord の人々の精神状態とよく似た停滞状態に陥っているようにみえるのである。それは Marx の説明によれば、「静かな絶望」という文化的病いである。“Resigned to a pointless, dull, routinized existence Thoreau’s fellow-townsmen perform the daily round without joy or anger or genuine exercise of will.”<sup>69</sup>

大学について Gilley はこう語る。“The atmosphere is relaxed. There’s no ‘publish or perish’ hanging over everybody’s head. There are no geniuses around to make you uncomfortable. Life is peaceful here.” (p. 36) 研究はおこなわれず、授業のテキストは何十年も、Fairchild のつくったおなじ「文法の原理」が使われている。人々は変化をおそれ慣習から踏みはずし、調和を乱す事を最も危険なものにとらえている。Pauline によれば “nature, prosperity, and some sort of laziness” (p. 21) のなかで「満ち足りて」いるのである。

この閉鎖的な、変化のない空間は、周囲の自然の豊かさとは反対に、不毛さにみちている。Bucket の論文は永久に書き直しを続けるように見え、彼の家もいつまでも完成しないかのように見える。Fairchild—この名前は健全さと小児性をおもわせるが、自作の文法書を延々と改訂し続ける。Levin ともう若くない同僚 Avis Fliss との事件は不毛な喜劇としかいいようがない。彼女に迫られて、フットボール観戦用の毛布を敷いて研究室の床の上で彼女を抱こうとするが、Gilley にみつきそうになりあわてて中断する。しかも、最初 Levin をひきつけた豊かな胸は、実は手術の傷跡があり、さらにまた病気の為にしこりができて痛みのために触れることもできない不毛な胸なのである。最も精力的であり理想的な家庭を持っているかのごとくに見える Gilley は実は子供をつくる能力がなく、養子をとることで家庭らしさをつくりだしているにすぎない。美しい田園、Cascadia は、その内部へ入ってみると James Mellard が言う “spiritual and intellectual wasteland”<sup>69</sup> としか呼び得ない空間であり、その不毛な繰り返しは自然のサイクルの歪んだ模倣のようである。

即ち、不毛な田園というビジョンが描かれていると言える。

失敗をおそれ安定を望む、秩序を重んじる小心な教師として自分を見ていた Levin だが、自己の理想、「文明を破壊から救いだすもの」を教え、「人間の意味や自由の必要性を何としてもおしえなければ」(p. 103) と言う使命感が新しい変化も芸術の価値も認めない、硬直した実用作文中心の大学のありかたに反発を強めて行く。失職の不安を、追放された前任者 Leo Duffy が暴徒にコントロールと鳥の羽根をつけられ、町から運び出される亡霊じみたイメージが象徴する (p. 78) Leo Duffy とは Levin の前任者であり、つねに噂のなかにしか登場しない神話的な人物である。彼は規則と大学の現状に抗議し、固苦しい性道徳を無視して同僚の妻と恋愛事件を起こし、極めて保守的な大学でマルキシズムを積極的にとりあげようとして、危険人物として追放されたのである。彼の姿は急進的な害毒、反抗的な駄駄っ子、理想と主義に忠実な大胆な若者、個性と魅力のある男として、追放されたあとも人々に記憶されている。Levin はその人物像に関心を抱き、彼の事を尋ね歩くようになるが、それはまるで Hawthorne の *My Kinsman, Major Molineaux* を思わせる人捜しの過程である。彼が Duffy の名を口にただけで、反感、怒り、恐怖、密かな賞賛と言う激しい反応をひきおこす。このことは、彼の未来を暗示する不安をかれに感じさせる。理想の人生を生きられなくなる不安が、皮肉にも、彼自身の理想と対立するのである。しかも、彼がもう一つ人生に求めたもの、愛さえが彼の理想を阻むものとなる。

Levin が愛を求めるのは常に間違った相手一人妻 Pauline、学生 Nadalee、同僚 Aviss であり、間違った場所一牛小屋、研究室の床の上、森であり、性の行為は喜劇的な状況によって中断されることも多い。しかし彼の愛の追求は無邪気な冒険から次第に深い commitment へとすすみ、彼の中で理想と愛とがせめぎあうまでになるのである。

最初の相手はウエイトレス、Laverne である。欲望のために彼女を求めた Levin は、車もホテルに泊まる金もないので彼女の兄の納屋で牛の糞の上で欲望を遂げようとする。“Excitement boiled up in Levin as he foresaw ad-

venture,” (p. 72) そして納屋の中での体験は、Levin に自分が全く新しい局面の生を生き始めたのだと感じさせたのだ。

“The warm, fecund odour of the animals and the sweet smell of the hay and grain stored in the barn, filled Levin with a sense of well-being. It was overwhelming how his life had changed in a month. You gave up the Metropolitan Museum of Art and got love in a haystack. ‘My first barn,’ Levin murmured. (p. 74) ここには、牧歌的な愛が喜劇的に描かれているとみることができるだろう。突然現れた留学生に洋服を奪われてしまい、行為を中断して彼らは何時間も半分裸で歩いて帰ることになり、彼女にはのしられることになるからである。ここには、2つの Levin の面が示されていると言える。1つは、冒険を求めるロマンティックな若者、もう一つは不運と失敗を運命づけられたシュレミールである。多くの批評家は Levin を全くの喜劇的人物、場違いの愚か者 (fool) であるとみなしているが、確かに Lavarne との関わりは、牧歌的な面があるにせよ滑稽としかいいようがないが、その滑稽さは彼の内面とは無関係な不運としか呼べないものによってもたらされたものなのである。同僚 Avis との愛の体験は前述したように喜劇的な中断におわるばかりでなく、一時的な愛情すら介在しない彼らの関係や見掛けの豊かさを裏切る病気に蝕まれた彼女の肉体は、Cascadia の不毛さそのものなのだ。そして、この行為が Cascadia 大学の中で行われた事は、不毛な空間であることを強調するのではないだろうか。

だが、彼がより大きな自然の中に出ていくと、彼の愛の冒険は急にロマンティックな様相を帯び、喜劇的でなくなるのである。彼の教える学生 Nadalee は前の二人とは違って、若く美しく Levin に愛情と意志の交流を求め彼もまたそれを求めた。そして、車が彼と Nadalee の関係、彼と人生の関係をさらに大きく変えることになる。前に挙げた Leslie Fiedler の説にならえば、車を運転することは自由を手に入れる事であり、西部小説のヒーローがもつ自由と力を象徴する。皮肉にも車は彼の2つの面一すなわち、自由で独立した冒険者と、失敗と不運につきまとわれるシュレミールとしての面一とを彼に自覚させる事



になるのである。最初の運転試験に失敗すると彼は夜、雨のなかを「たった一人で冒険にとりかかり、」冒険が引き起こす危険一事故、監獄、「愚かしい違反者」となる自分を想像し、「生まれつき、おれはそういう人間なのだ。」(p. 120)と感じる。だがそれは Levin の想像であって、彼が現実体験するのは素晴らしい達成感一力の認識である。

“Behind him on the misty light-studded highway lay San Francisco, ahead Seattle, cities he longed to see. He pictured U. S. A. as a structure of highways and freeways, Levin at the wheel……speeding up hill and down in his trusty Hudson, his lance at his side, driving through a series of amorous and philanthropic adventures……he was all in one piece and marvellously elated.” (p. 121)

さらに彼は自分の力を試したいという欲求にかられて Nadalee と恋愛関係を Cascadia の外の世界で持とうとする。海岸のホテルで彼女に会う計画は、Levin にとっては 冒険であり “Eden” (p. 127) へ行くことであった。車によって得た自由の喜びを感じつつ、自分が不器用者から “man of hands” になったと思ひ新しい自分自身を確信する。まず自然は彼に喜びと自由の感覚を与えるのである。 “……he was……miraculously in motion along countryside, enjoying the compression of scenery. Heading towards unknown mountains in voyage to the Pacific Ocean, world’s greatest. Imagine, Levin from Atlantic to Pacific—who would have thought so only a few years ago?” (p. 127)

彼は生まれて初めて「巨大な岩山、深い緑の森、山火事の幽霊じみた残骸」を目にし、「アメリカの顔を発見した」(p. 128) と感じ自分が全ての上に聳える高みにモーゼのようにのぼっているのだ、と高揚した気分を経験する。

だが勿論このような大自然が破壊しつくす危険を秘めていることも彼は経験する。“abysses deeper than those in dreams” (p.129) は死体も見つからないほどの深さで、彼に危険を感じさせる。彼は故障と落輪を繰り返し、危険に脅え、恐怖にとりつかれて、絶望的に車を走らせる。Levin は、“endless vi-

sions of disaster”のために、初めはエデンへの至福の旅だと感じられた旅が、今度は煉獄の旅であり、彼自身は“idiot”でしかないと感じる。(p. 133) 道を間違えたと言われた彼は、「人生の全ての失敗、誤った道、無駄におわった行為」(p. 134)に思いをめぐらせる。だが、失望と失敗は勝利へ突然変化する。“a golden lace of moonlight on the dark bosom of the vast sea.”(p. 134)が彼の前に開け、遂には Nadalee のもとに辿りつく。ここに見られる Levin と Nadalee は冒険をへてめぐりあったロマンティックな恋人達そのものである。彼が「飢えたように抱きしめると彼女の身体はまばゆく輝いた」のであった。(p. 135)つまり、彼は勇敢で向こう見ずな恋人としての経験をしながら、同時に不運や失敗の恐怖をも経験したと言える。そして、彼にそのような経験をさせたのは、Cascadia の外に広がる自然なのだ。

しかし、Cascadia に戻ってみると、大学で自分が起こそうとしている改革にとって彼女との関係が邪魔であるとみなして、Levin は彼女を拒否してしまう。Cascadia の外では危険ではあるがロマンティックな冒険であった Nadalee との関係は、Cascadia では教師と学生の一時的恋愛、身の安全を脅かすスキャンダルとしか感じられず、理想の追求によって彼女との経験を否定したのである。しかし、彼の理想の追求は、危険が内在していることに気づかされる経験をもたらすのである。彼は学生の作文が盗作ではないかと言う疑惑を抱き、自己の正しさを直感して追求する。不正を証明することは不可能であるように見えた。だが不正を否定し Levin を嘲笑していた学生は、追求が続くにつれて、「目が不安に濁り」追い詰められて生気を失い、Levin は罪を追求するあまり「犠牲者を一人つくりあげた」(p. 154)ことに気づき、追求をやめる。理想と正義を追求する余り、他者を犠牲者にしてしまう危険を認識したからである。彼は、教師は“liberator”(p. 157)であるべきだと悟ったのだが、上司 Gilley はこれを敗北とみなすのである。内的世界においては Levin は理想の探求者であるが、外的世界においては敗者とみなされてしまうと言う矛盾が現れるとみることができるだろう。

彼が次に経験した愛は、自然の中でかれに勝利と感動を与えるものであつ

た。春のような花の咲き誇る自然に、彼は「新しい季節を、新しい生活を、自由の中に生まれ変わることを、永遠にさぐり続けている」(p. 170) のである。彼は、自然の変化はただの繰り返しではないかと考え、栄光は自然のなかでなく「人生をもとめる願いから生まれるもの」(p. 171) であると思った。これは、まさに Thoreau が Walden を去るときに得た認識一目を心の内なる西部へむけよ、夢の方向へむかえば理想は可能である—と通じる認識ではないだろうか。これらの思索は明らかに「森の持つ神秘性、大自然の中にある目に見えぬ生の存在」(p. 172) によって触発されたものであり、Levin は Thoreau のような自然との対話をしたのだといえる。彼がそうした自然からの啓示の中に身を置いているそのときに、Pauline と出会い、以前から Levin へ共感を示し Cascadia の現状に不満を抱く彼女と、森の中で愛し合った。それは彼にとって初めての完全な勝利の感覚であった。「Levin は、そのすばらしさを始めから終わりまで、はっきり意識していた。ただ、広大な森林に囲まれた中で。何という勝利感。」(p. 174) この森が大学の実習用林であること、Cascadia と自然の間に位置することは、この彼の勝利と Cascadia の現実とのあいだが隔絶していないことを暗示するものといえるかもしれない。しかし、互いに理解と共感を抱きながら、Levin にとってこの愛が彼の理想を打ち倒し彼を失敗者、罪人にしてしまう力を持つことが彼を苦しめる。Levin は大学の現状を変革するために、すすんで学内の政治に参加する。現状維持と出世しか頭にない Gilley を敵とみなし、たったひとりで体制に挑戦し、Gilley を打ち倒すため、科長選挙に立候補するのである。しかし、Pauline が Gilley の妻である限り、彼の理想への挑戦と彼の愛はどちらかが否定されねばならなかったのである。Levin にとって、この愛は深いものであると同時に危険な罠りであると思えた。妻であり母である Pauline と倫理的には別れるべきだと彼は考え、「Levin を力あるものにするためには Pauline を棄てるよりほかはない。」(pp. 222-223) と考える。しかも、この愛は彼から職業的理想の実現の可能性を奪い、自由を奪うものである。ここで Malamud は理想主義者が陥りやすい畏—理想と正義を追求するあまり非人間的な egoist になることを、いわば幸運な墮落<sup>10)</sup>に

よって免れる道を開いたとみるべきではないだろうか。幸運な墮落とは、罪が不可避のものであるという意味であり、この場合姦通というきわめて小説的かつ古典的な罪である。苦悶の中で、彼は自分を「緋文字」の姦通の罪を犯し苦しむ男デイズデイルに重ねあわせる。

“Levin had sulphurous visions of himself as Arthur Dimmesdale Levin, locked in stocks of a platform in the town square, a red A stapled on his chest, as President Labhart stood over him, preaching a hell-fire sermon denouncing communist adulterers, the climax of which was the public firing of Levin out of college” (p. 212)

孤独で自由、独立した個人が罪を犯しいわば幸運な墮落を経験し、そのことによって成熟し、人間的な生を獲得する苦しい過程なのだと考えられる。Pauline が Leo Duffy の恋愛の相手であり、その証拠写真を撮ったのが夫であることを知ると、彼は、一度は彼女と別れるが、そのために激しい“Apathy” (p. 220) と喪失感におそわれる。それは、理想と正義の名のもとに、苦しみを引受け、成熟することを拒否した為なのである。

遂に、彼は愛を棄てない決意をし、予知していたように選挙に破れ、Pauline と二人の養子とともに、何の将来の見込みもなく、大学を追われる。この結末で、Malamud は人間が多義的な存在であり、敗北のなかに勝利と成熟がありうることを示そうとしたのではないだろうか。確かに、Levin は職業的理想を阻まれ、いびつな家族をひきうけ、彼の Cascadia での新しい生は失敗に終わったように見える。出ていく彼らを Gilley が写真にとり、“Got your picture!” (p. 316) と言うとき Levin は Leo Duffy と同じただの姦通の相手に成り下がりが、しかも Leo Duffy は一人で自由に逃げ出したのに、彼は家族と言う重荷を背負っているために、Leo Duffy のパロディに過ぎない a fool にもみえてくる。

だが、彼は Leo Duffy も Gilley も成し得なかったこと—Pauline をその不毛な生活から救ったのである。彼女は妊娠していたのだ。その意味において、彼は救済者であり、それは同時に理想と正義の名のもとに彼が他者を犠牲にす

る egoist となる非人間的な生におちこむことから、自己を救ったとも言える。しかも、かれの文学研究のプログラムは学長に採用され、彼の教科書改革も実行されることになったのである。彼が打ち負かされつつ、ほんのわずかでも世界を reform しなかったとはいえないではないか。敗北のなかの勝利、言い換えれば打ち負かされつつ、彼は世界をわずかながらも変革しその足跡を残すことがかろうじて可能であったとみることができる。

Levin と Pauline が Cascadia を追われる姿は、いびつなアダムとイブの姿に似ている。前述したように、Cascadia は不毛な田園なのである。アダムの墮落の物語が、現代の不毛なエデンで語られていると見ることも出来るだろう。そこでは、アダムも30才の凡庸な男でありイブも中年にさしかかった満たされない女である。この小説の結末は従って、二つの意味に解釈できる。不毛な田園から、幸運な墮落によって、人間的な少なくとも不毛ではない生を、よろめきながら手にいれたのだととらえることもできるし、理想を抱いて西部へやって来て、喜劇的な失敗と無鉄砲な挑戦が、家族と言う重荷と無残にもくずれた理想をもたらしたととらえることもできるのだ。A *New Life* において、Malamud は、アメリカの田園における再生と英雄の神話を再検証し、アメリカ文学における田園、再生、自由と墮落のモチーフを重ね合わせながら、現代の不毛な世界における必ずしも英雄的資質があるようにはみえない凡庸な人間のなかに、確信にみちてはいないものの、英雄性へのかすかな希望を見ようとしたのだと言えるのではないだろうか。

#### 注

- (1) このようなアメリカ文学固有の田園、再生、英雄的な人物の物語については、R. W. B. Lewis, *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*, (Chicago: University of Chicago Press, 1955,) および、Leo Marx, *Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*, (Oxford: Oxford University Press, 1964) に詳しい。
- (2) Mark Goldman, "Comic Vision and the Theme of Identity" in *Bernard Malamud and the Critics* edited by Leslie A. and Joyce W. Field. (New York: New York University Press, 1970), p. 155.

- (3) Giles B. Gunn, "Bernard Malamud and the High Cost of Living" in *Adversity and Grace* edited by Nathan A. Scott, Jr. (Chicago : Univ. of Chicago Press, 1968), p. 64.
- (4) Sam B. Girgus, *The New Covenant : Jewish Writers and the American Idea*, (Chapel Hill : University of North Carolina Press, 1980), pp.26-27.
- (5) Girgus, p. 28.
- (6) Leslie Fiedler, "The Many Names of S. Levin : An Essay in Genre Criticism" in *The Fiction of Bernard Malamud* edited by Richard Astro and Jackson J. Benson (Corvallis : Oregon State University Press, 1977), p. 153.
- (7) Bernard Malamud, *A New Life* (New York : Penguin Books, 1961, 1968, reprinted 1973, 1981), p. 8. 本書からの引用はこれ以降は文中にページ数のみ示す。
- (8) Lewis, pp.25-26.
- (9) Marx, Chapter Three.
- (10) Marx, p. 226, p. 228.
- (11) Marx, p. 246.
- (12) Marx, p. 246.
- (13) James M. Mellard, "Four Versions of Pastoral" in *Bernard Malamud and the Critics*, p. 68.